



# 宮崎大学学術情報リポジトリ

## University of Miyazaki Academic Repository

コミュニケーション能力を高める外国語活動・英語  
-言葉で伝える力を育むために-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2014-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: アダチ, 徹子, 齋藤, 匡, 西田, 奈美, 山本, 延久, 西村, 清美, Adachi, Tetsuko, Tadashi, Saito, Nami, Nishida, Nobuhisa, Yamamoto, Kiyomi, Nishimura メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/5799">http://hdl.handle.net/10458/5799</a>

## コミュニケーション能力を高める外国語活動・英語 —ことばで伝える力を育むために—

アダチ徹子<sup>(1)</sup>・齋藤 匡<sup>(2)</sup>・西田奈美<sup>(3)</sup>・山本延久<sup>(3)</sup>・西村清美<sup>(3)</sup>

### Developing Communicative Competence in English in Elementary School “Foreign Language Activities” and Junior High School “English”: From the Viewpoint of Fostering Students’ Verbal Communication Skills

ADACHI Tetsuko<sup>(1)</sup>, SAITO Tadashi<sup>(2)</sup>, NISHIDA Nami<sup>(3)</sup>,  
YAMAMOTO Nobuhisa<sup>(3)</sup>, NISHIMURA Kiyomi<sup>(3)</sup>

#### I はじめに

学部附属共同研究の外国語活動・外国語部会は、平成25年度より「コミュニケーション能力を高める英語・外国語活動—伝え合いたい気持ちと伝える工夫を重視した授業—」をテーマに、小学校における外国語活動と中学校における外国語科（英語）の授業をどのように連携させるかについて研究を行ってきたが、昨年までの研究で共通理解を得ることができた。多くの学校が行っている英語の文法項目や語彙の系統性で考えるのではなく、児童生徒に「伝え合いたい気持ち」をもたせ、発達段階に応じた「伝える工夫」を積極的に行わせることにより、5年間を通じてコミュニケーション能力を高めるといことである。

今年度は、附属小学校と附属中学校がともに新しいテーマに取り組み始めることもあり、それぞれの学校テーマに沿いつつも、言葉を使って相手と関わり、コミュニケーションを通して知識や感情を共有し、互いに成長する児童生徒を育成する授業の在り方について研究してきた。ここに本年度の研究結果を報告する。

#### II 附属小学校における研究

今年度の附属小学校における外国語活動の研究テーマは、「切磋琢磨する子どもを育む外国語活動」である。まず積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの姿を具体化し、次に切磋琢磨する子どもを育む学習活動の工夫を行った。

##### 1 積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿の具体化

昨年度までの研究において、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿」とは、「英語

---

<sup>(1)</sup>宮崎大学大学院教育学研究科

<sup>(2)</sup>宮崎大学教育文化学部附属小学校

<sup>(3)</sup>宮崎大学教育文化学部附属中学校

やジェスチャー等を使って、何とかして伝え合おうとする姿」と捉えてきた。それを踏まえて、子どもたちが「伝え合うことの難しさ」を感じるような仕掛けを授業の中に設定し、子どもたちがその難しさを乗り越えようと工夫して伝え合うことで、伝え合う喜びや伝え合うことの大切さを実感させるような学習指導のあり方を追求してきた。

しかしながら、活動相手の伝え方や相手が伝える内容に面白みを感じないときには、聞くことへの積極性が十分ではないということもしばしば起きた。そこで、今年度は会話をすることそのものに意欲をもち、伝え合うことに価値を見出すよう「切磋琢磨する」子どもであってほしいという期待をもち、外国語活動の授業でそのような場面を設定できるよう工夫することにした。

また、次の学習指導要領ではグローバル化に対応した新しい英語教育への改革がなされる見通しであり、高学年では教科となる。中学校英語へのつながりを意識しつつ、これまでよりもさらに「言葉で会話をつなぐ」力を育てる可能性を探っていくことにした。前年度までは子どもへの負担が増えるとして踏み込まなかったが、学習指導の工夫により子どもに挑戦させることができるのではないかと考えた。

## 2 切磋琢磨する子どもを育む学習指導の工夫

子どもに「言葉（＝英語）で会話をつなぐ」よう仕向けるために、子どもが使える可能性のある英語を整理すると、「学習する単元で新しく出会ったもの」「前単元までに出会ってきたもの」「反応を示すためのもの」の三種類が主なものであろう。これらの英語表現を、必要に応じて積極的に使用できることが望ましいが、「習った英語は使えなくてはならない」と子どもに強いるように受け取られてはならない。むしろ、子どもが会話の相手とうまく伝え合うことができない場合に、「この表現は伝わらなかったけど、まだ他の表現も知っているから使ってみよう」というような積極的な気持ちを持たせることがねらいである。自分が手元にもっている使える英語が少ないと思うことが、コミュニケーションに対しての消極的な気持ちを生んではいないだろうか。「英語表現Aで伝え合えなくても大丈夫。いざとなったら使える英語表現Bがあるから。」という思いがあれば、他者とのコミュニケーションに積極的に臨むことができ、会話そのものに伝え合う価値を感じることができるのではないだろうか。もちろん、これまで育んできた言葉によらないコミュニケーションを活用する力も重要である。英語という言葉で会話をつなぎ、必要に応じてジェスチャー等で会話を補っていくことができれば、よりコミュニケーションをうまく運ぶ手段の幅が広がるわけである。以上の考察をもとに、切磋琢磨する子どもを育む学習指導の工夫として、英語で会話をつなぐ経験ができる場を授業の中に仕組むよう試みた。

## 3. 授業実践の例

前項までの考察を踏まえた授業実践の一例として、第6学年「友達を旅行にさそおう」の実践について述べる。

### (1) 英語表現の選定

前項Ⅱの2で述べた3種類の英語表現は、この単元においては以下の通りである。

- ・本単元で新しく出会ったもの

Where do you want to go? I want to see～. I want to eat～. I want to go to～.

- ・前単元までに出会ったもの

What color is it? What shape is it? It's～.

・反応を示すためのもの

OK. I see. Pardon? One more time, please. That's right. That's wrong. Almost.

(2) コミュニケーション活動の工夫

メインとなる活動は、行きたいところを伝え合うものであるが、やりとりの中にクイズを織り交ぜた会話とした。自分が行きたいところを伝える側は、行きたい国等を質問されても、すぐに答えるのではなく、「見たいもの」や「食べたいもの」について話し、それらの情報から行きたい国等を推測してもらうようにした。こうすることで、一方的な情報の伝達ではなく、伝える側と聞く側の両方が情報の共有を図る交渉をする形になる。このようなやりとりが「切磋琢磨をする」会話に近づくのではないかと考えた。

【会話例①】

A: Where do you want to go?

B: I want to eat pizza. I want to see soccer game. Please guess!

会話例①のようなやりとりで答えが分からなかったら、国旗の色や形を問う英語表現を使うようにさせた。

【会話例②】

A: Flag hint, please. What color is it? (学習プリント [図1] を見ながら)

B: Green and white and red.

A: Italy?

B: That's right. I want to go to Italy. Let's go to Italy!

いざとなったら役に立つ②の英語表現が手元にあることを感じさせることで、会話に積極的に臨むようになるのではないかと考えた。また、複雑な形等を伝えるときに、ジェスチャーも有効でなる。

(3) 子どもに意識させたいコミュニケーションのポイントの設定

積極的にコミュニケーションを図る姿の具現化を図る一助として、コミュニケーションのポイントとして以下の内容を子どもに意識させた。

- ・伝わりやすいように声をコントロールする。
- ・相手の目を見る。
- ・反応を返す。

次の英語を使おうとする: OK. I see.

Pardon? One more time, please.

次の態度を表出しようとする: 相づち, 表情

- ・必要に応じてジェスチャーをつける。

反応を示すための英語は、教師から示していったが、その他の内容については、子どもの言葉(気付き)を大切にしながら複数単元をとおして徐々に増やしていくようにした。(図2)。



図1 学習プリント

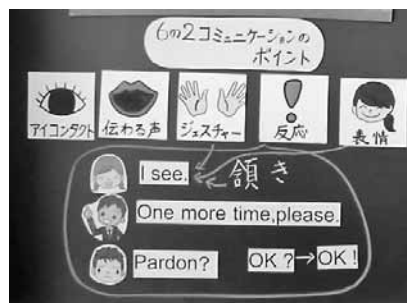


図2 子どもの言葉で作ったポイント

授業では、3の(1)で選定したような表現を子どもたちが使って会話を楽しんでおり、教師が子どもの負担に留意すれば、意欲的に英語表現を使えることがうかがえた。その反面、何とかして伝えようと必死にジェスチャーをする姿は少なかったが、国旗の一部の形を動作で示したりする子どももいた。

#### 4 成果と課題

前年度までの研究で目指していた「英語やジェスチャー等を使って、何とかして伝え合おうとする姿」から一歩踏み込んで「英語で会話をつなぐ姿」を目指すことで、子どもが身に着けるコミュニケーション能力の新たな可能性を拓くことができたと考える。それは使いこなせる英語表現が増えたというだけでなく、子どもが自分のコミュニケーション能力にもつ自信であり、余裕をもって切磋琢磨しながら言葉のやりとりを楽しむことができることでもある。実際に、これまでは他者との会話に自信がもてていなかった子どもが、他者と正面から向き合っ、表情豊かに英語での会話をするようになっていく姿が見られるようになった。

しかしながら、授業の参観者から英語スキル偏重ではないかという指摘もあった。これまでの研究と実践があってこそこの授業であったが、前述したように子どもに「習った英語を使わなくては」という心理的負担を感じさせることが本研究の趣旨ではない。英語で会話をつなぐことを大切にしながらも伝え合うことの喜びを味わわせる活動を心がけ、見直しも含めながら「切磋琢磨する子どもの姿」を追い求めていく必要がある。

### Ⅲ 附属中学校における研究

今年度の附属中学校の研究テーマは、「学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる生徒の育成～獲得した表現を使える表現につなげる～」である。これまでも生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成に努めてきたが、生徒がなかなか既習表現や単語を活用できない、すぐに思い出すことができない、どの表現を使ったらよいか迷ってしまう、などの課題があった。今年度は、3年を見通した明確な指導計画を整備する、学習指導において場面設定や教材を工夫する、友だちとの関わりを重視する、という手だてから指導を改善し、生徒のコミュニケーション力の向上を目指すことにした。

#### 1 3年間を見通した指導計画・目標・評価システムの構築

これまでも各学年を担当する教員同士で指導目標や計画を共有してきたが、改めて全学年統一した目標を設定しなおし、また各学年の各単元での目標を明確化した。まず、全学年を通した目標を「協働的な学習をとおして、自分の表現力を高める」と設定した。さらに、各学年のゴールイメージを設定し、そこからbackward designを行い、各学年の年間指導計画を作成した。各学年のゴールイメージにより目指す生徒の姿は以下の通りである。

- 1 学年：学習したことをベースにして相手に伝える
- 2 学年：自分の考えたこと・体験したことを相手に伝える
- 3 学年：新たな表現を取り入れて、相手に伝える

教科書の単元だけでなく、学んだことを実際に使う経験をするプロジェクトや、パフォーマンス活動なども織り込んだ計画となっている。

この年間指導計画に沿った評価の計画も構想し、評価表を作成した。教科書の単元で学んだことを評価する「単元評価表」を作成することにより、評価項目を全学年で統一化し明確にできたとともに、より生徒のゴールイメージを意識した指導につながった。また生徒たちも、ふだんの授業においても評価されるポイントを意識し、伝え合う工夫をするよう努めることができた。パフォーマンステストの評価では、評価項目を「内容」「発音」「声の大きさ」「ジェスチャー」「文法」として5段階で評価することとし、各学年の発達段階に応じた評価視点を作成した。生徒にとっても、評価のポイントがわかることで気を付ける事項が明確になり、5段階評価を意識してパフォーマンスを行う動機づけとなった。このように、統一した評価システムを構築することにより、今後生徒の変容や成長を把握しやすくなると思われる。

## 2 場面設定や教材の工夫

生徒が既習表現を自由に使いこなせるために特に工夫したのは、「表現ファイル」と「Outputの場の設定」である。表現ファイルは、活動中に学んだ表現や調べて獲得した新しい表現、友だちから教えてもらった表現などを書きとめるファイルで、生徒各自に持たせた(図3)。教師や教科書から一方的に与えられる表現とは異なり、生徒が自分に必要な表現や、面白いと思った表現などを自主的意識的に選び取ることがポイントである。生徒がより「使ってみたい」という思い入れのこもったファイルとなっている。

生徒が学んだ表現をスムーズに使いこなせるようになるには、実際に使う経験を重ねることが必要である。学校での授業時数は限られているが、その中で最大限にoutputの機会をもたせるよう努めた。図4は附属中学校を紹介するポスターを作成した例である。



図3 表現ファイル



図4 生徒の作品

## 3 友だちとの関わり

コミュニケーションの多くが対人コミュニケーションであり相互の交流であることを考えても、生徒のコミュニケーション力の向上には、友だちとの関わりを活用することが効果的である。授業の中でできるだけそのような活動を盛り込むことにした。以下はその例である。

表現カード：授業の帯活動として、これまでに学んだ表現が書かれた表現カードを手に持ち、その表現を使いながらたくさんの友だちとの会話をする。会話を楽しみながらも繰り返し復習することができる。

ペア・グループワーク：ペアやグループでスキットづくりやテーマに沿った作品づくりなどに取り組ませた。

パフォーマンス：さまざまなパフォーマンス活動を年間計画に沿って実施した。習得した表現を実際に使う経験をする場であり、これを重ねることによりどんな場での表現を使えばよいかを体得していくことになる。また、友だちと実際に対話することや発表を聞く



図5 パフォーマンスの様子

ことにより、声の大きさ・発音・ジェスチャーや表現方法などに生徒同士で気づくことができる良い機会となった。(図5)

#### 4 成果と課題

今年度の研究により、以下のような成果が得られた。まず、年間の指導計画を定め、パフォーマンス活動や評価に関する計画も整えたことにより、年間のどこでどのような活動を生徒にさせるか、見通しをもち、すべきことが明確にできた。評価の視点を明確することにより、生徒につけさせたい力を意識した指導の改善を行うことができた。教師が連携し、3年間を見通した指導を行うことにより、各学年の段階を踏んだ積み重ねが生徒たちの発表や取組に反映されており、成長を実感することができた。また、友だちとの関わりを生かした指導は、対人コミュニケーションの練習として効果があるばかりでなく、友だちと協力して、達成したときの喜びや互いのよさを実感できる機会ともなり、良い思い出として生徒の記憶に残るようであった。

一方今後の課題としては以下のようなことが挙げられる。まず、今年度はスピーキングテストを計画的に実施することができなかった。生徒が既習表現を適切に使用しているかどうかを確認するためにも、効果的なタイミングでスピーキングテストを実施していきたい。また、その際表現カードの活用も検討したい。さらに、生徒同士が関わる協働的な学習は非常に効果的であるので、今後は表現活動だけでなく授業のさまざまな場面で取り入れていきたいと考えている。

### IV 考 察

外国語活動・外国語科部会では連携して研究を進めている一方で、それぞれの学校の研究テーマにも沿うような研究と実践を行っている。今年度は、どちらも児童生徒が「英語表現を使うこと」に焦点を当てることとなった。これは、今まで継続して行ってきた研究テーマの副題「伝えたい気持ちと伝える工夫を重視した授業」のうち、主として「伝える工夫」に関するものであると言える。

小学校では、「切磋琢磨する子どもの姿」という研究テーマに基づき、子どもが「英語を使って会話をつなぐ」よう学習指導を工夫することとなった。また、中学校では習得した表現を適切な場で使用する力をつけさせることが主眼であった。小学校における研究は、英語スキルの定着を目指したものと解釈される可能性もあり、事実公開された授業の参観者からはそのような方向性を危惧する声も聞かれた。しかし、研究の意図は子どもに自分のコミュニケーション力に関する肯定的なイメージをもたせることであり、「実際に他の表現を使ってみたらうまくいった」という経験をさせることである。これは、よく引用されるCanale (1983) のコミュニケーション能力モデルのうち、Strategic Competence (方略能力) ともいえるものであり、かつてBiyalistok (1983) などがL2-Based Strategiesと呼んだものに近いと言えよう。コミュニケーションがうまくいかない時にも修復できるという自信であり、その手段としてこれまでジェスチャーなどの非言語的手段を主として用いていた子どもに、英語でコミュニケーションをつなぐ手段をもっていると感じさせる最初の一步となることをねらっている。同時にこの自信は「言い方は一つではない」ことに関する確信であり、中学校段階でより多くの表現や語彙を使いこなす時にも生徒のコミュニケーションを支える。

さらに、中学校での課題であった生徒がなかなか既習表現や単語を活用できない、すぐに思い出すことができない、どの表現を使ったらいいか迷ってしまう、などの生徒の実態は、学んだ表現が意味や場面とうまく結びついていないことを意味すると思われる。この問題を解決するには、適切な場面で生徒が自ら英語を使用する経験を増やすより手はないであろう。この文法事項はこういう意味であると頭で理解しただけでは、いざ表現したい場に遭遇した時に自信をもって使うことができないことは自明であるが、生徒が英語を使う場をできるだけ多く設定することはあまり実践されていないのが実情である。今年度行った年間計画や評価計画の整備は、生徒の英語使用の場を確実に設定するための試みである。

また、附属中学校ではこれまで以上に生徒同士が関わる機会の設定に努めた。これまでの研究でも、異なる個性をもつ生徒が協働することにより、互いの良さを認め合い学び合うことができ、教師が期待する以上のことを学ぶことがわかっていたが（アダチ 2014: 167）、その効果を再確認できた。そのことは、小学校における実践でもしばしば感じることができた。

以上のように、今年度は特に「伝える工夫」に関して研究の成果が得られ、実践の幅を広げることができたとともに、小学校と中学校で連続して取り組むことのできる視点が得られた。来年度以降も小中の連携を重視しながら研究を重ねていく。

#### 引用文献

- アダチ徹子 (2014). 「第5章第2節 4 技能の技能別・統合的指導」深澤清治他 (編著)『中等英語教育』 pp.153-167, 協同出版.
- Bialystok, E. (1983). Some factors in the selection and implementation of communication strategies. In C. Faerch & G. Kasper (ed.), *Strategies in Interlanguage Communication*, pp. 100-118, Longman.
- Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richards & R. W. Schmidt (ed.), *Language and Communication*, pp. 1-27, Longman.